慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世資本主義起源考（四）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.5 (1922. 5) ,p.644(64)- 652(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19220501-0064
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220501-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世資本主義起源考（四）

阿部秀助

最近獨逸の經濟學界に於ける鬼才はマックス、ウェバーである。彼は其論文「プロテスタントの倫理思想と資本主義の精神」(一)に於て資本主義の精神即ち資本主義的精神を理解するに單なる營利的衝動と見做さずして寧ろ倫理的色彩を有するBerufsideeを以てしたのである。

以上、述ぶるが如く資本主義なる概念は之れを物的と精神的とに解するものによつて多少相異なるも、然かも此兩者を通じて資本主義的經濟方法、資本主義、資本主義的時代なる名稱が事實上大企業の發展を意味することは明白なることである。

1　Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitics, Bd. 20 u. 21.

六

ゾムバルト教授は哲人カントが曾て其傑著純理批判に於て述べたる「內容なき思索は空虛にして概念なき觀照は盲目なり」との意義を其著近世資本主義論第一卷(第一版)の卷頭に掲げし如く、彼は自己の概念を更に史的證左によつて透徹的たらしめんとせり。斯くして彼の近世資本主義論第一版が近世資本主義の發生條件として吾人に敎えし史的要素は貴金採掘と殖民經濟と地代の集積的作用であつて、殊に第三者を以て之れが最も重要なる要素と見做したのである。

蓋、近世資本主義發生の一要素たる採鑛の事業は其歷史極めて古く、紀元前三千年埃及人は上部埃及テベス地方に於て此事業を開始し、紀元前二千年アッシリア人はチグリス上流の地方に於て銅鑛を登掘せしとの傳說あり。降てフェニシア人は西班牙の南部及希臘、トレチア地方にて金及銅を採掘し希臘人がアッチカ南端のラウクリオンより獲得せし銀、鉛、銅はテミストクレスをして波斯の大艦隊に對抗せしめし戰艦二百餘艘の建造費となるに至つたのである。羅馬はカルタゴ滅亡後シシリー、サルヂニア、西班牙の鑛山權を握り更に其勢力の東方に及ぶや小亞細亞、希臘、マセドニア地方の鑛山をも獲得するに至つたのである。當時ストラボ

ーの記せし處によれば西班牙の鑛山のみで約四萬人の工夫を使役せりと。次に中世にありて最も鑛山に富んだ地方は獨逸及墺太利で、例者エルザス、ロートリンゲン、レーバータール、マスミュンステル、シュワルツワルト、マンスフェルト、ゴスラー（ハルツ）フライベルグ、トリエント、イグラウ、クッテンベルグの如き金銀の產地として有名で殊に十五、十六世紀に亘つてはアンドレアスベルグ、ゴッテスベルグ、ダルノウォッツ、シュネーベルグ、アンナベルグ、ヨアヒムスタレル、シュワッワの如き豐富なる金銀鑛發見せられ、爲めに歐洲に於ける貴金屬の產額は著しく增加するに至つたのである、今、ゾムバルド敎授の算出せし處によれば墺、匈兩國地方から採掘せられた金の平均年額は千四百九十三年から千五百二十年迄は五百五十八萬麻、千五百二十一年から千五百四十四年の間は四百十八萬麻、千五百四十五年から千五百七十年迄は二百七十九萬麻、千五百六十一年から千五百八十年迄は二百七十九萬麻、千五百八十一年から千六百年迄は二百七十九萬麻、又、銀の產額としては千四百五十年から千五百年迄の間に平均一年の產額八百萬麻、千二百五十年から千四百五十年の間は平均額五百萬麻、十三世紀の前半期と十二世紀とは平均三百萬麻、十、十一兩世紀は約二百萬麻、八、九兩世紀は約一百萬麻である(一)、而して是等の產地を所領せる者或は之れを發見し經營するものにとりて以上の產出が直接に各自の財產と化せしことは明白なる事實である。試みに我邦の歷史に就いて見るに豐臣秀吉の政治的勢力の一部が鑛山其者に負ふ處ありしことは彼が之れを獨占せしを以て知るを得るのである。例者、南部藩祖南部信直時代に於ける南部家の申渡の中に「只今の秀吉殿下の仰せに依つて見ると佐渡の國とか越後の國或は越中の國或は信濃の國甲斐の國此國々は金銀が出るが、この金銀の出る金山は殿下の御取上げになつて御奉行が附いて居る」殊に鑛山獨占の政策を透徹的に實行したものは德川氏である。例者德川家康の如きは武田氏の遺臣大久保長安を信任して伊豆、石見、佐渡に於ける金銀山を採掘せしめたのである。當時我邦にありし基督敎の師父が本國に送つた報告書中に「內府（家康）は日本に於ても、京都に於ても關東に於ても、歷代の中にて、尤も富裕なる君にして、巨額の金銀を蓄積し、之れが爲め到る處に頗る人々に恐れらる、內府の京都方面にある時の住居なる伏見の第に貨幣を貯藏したるに、數箇月前、其重量の爲めて梁折れて一室陷落したり、此莫大

なる財寶は獨り諸人よりの數多の豐富なる献上物に依るのみならず、重に日本にある處の數多の金銀鑛山より來るものにして內府は悉く之れを獨占す、加之近頃再び發見せられ、每年非常の高を掘出すことゝなれり」と、斯くて家康は金銀を獨占せしの故を以て慶長六年銀座を伏見に設け大黑常是に命じて白銀の品位と定め、金銀貨を改鑄せしめた以來慶長十三年には伏見の銀座を京都に移し、次で慶長十七年には大阪及長崎にも銀座を設けて、專ら異國への渡銀に對する用を辨ぜしめたのである。斯くの如く自己の權力の擴張につれて務めて統一的貨幣制度の實績を擧げしことはマルコポロ以來貴金屬に富むとの我邦に對する傳說を實際に、家康の商政をして當時に於ける歐洲諸國の商業政策と密接なる關係を有せしむるに至り、併せて家康が政治的基礎を鞏固ならしむるに至つたのである。彼の代地制度の如き德川幕府の獨占的鑛山政策を示すもので例者、日光山輪王寺領分たる足尾より銅を產せしを以て同寺には別に代地を與えて足尾を沒收し、又、伊豫別子は其初め西條藩の領する處なりしが之れを取上げ、更に攝津多田莊は昔時より銀銅を產し幕府時代には淀藩の有する處なりしが之れ亦た幕府の手に收むるに至つたのである、斯くの如く幕府が全國の鑛山に對して自由に取上げ得る特權を上地と稱したのである。次ぎに一個人の場合に就きては住友家の富が其祖壽齋に負ふ處多きは明白なる事實にして彼は銅に含まるゝ銀を分析して採取する法を天正年中堺浦に來りし白人に得しと云ふことである。更に博多の富豪神屋宗湛の祖父壽貞に就きては石城志卷之七土產門の下に博多銀と題して「博多銀一名ゆづり葉銀とも云、福岡西町、槌屋藤大衛門が家に傳來せり、重さ二十九匁、厚さ一分ばかり裏は石目にして書判あり、按に神屋壽貞もろこしより歸朝して銀座をはじめし時此銀も出來けるなるべし、又極印に祿二とあるは年號の文字なるべし。頭字なくいつの頃とも分明ならずといへども壽貞が年譜を以て考ふれば享祿二年なるべきにや、中山與右衛門といふは銀座の名なるべし。又は奉行などの印ならんか。神屋壽貞は博多の產也。其頃いまだ日本には金銅吹分る事をしらずして多くの銅を明朝へ渡し吹分させけるを壽貞思ひけるは我國の重寶を異國へ渡す事、なげかしきわざ也とて妻子を捨、大明に入數十年が間留まりけるに、いかゞしたりけん一郡のあるじとなり、思ひのまゝ金銀の吹やう及び錫、鉛より銀を取るな

ど傳へ得て歸朝し諸國に金山を起せり、故に今に至るまで最初山入の時は必壽貞祭りといふ事をなすといへり。又、石見國其外のかな山にも壽貞明神と崇祀るとかや、今按に金、銅、吹分る事は本朝の人今にしらずといへり。なれ共、家説に從ひてしるし得る、又、近年、石見國かな山の者來りて博多に神屋壽貞といひし人の子孫有やと問、同處に波底寺といふ眞宗の寺あり、是を再造せんとて棟札をおろし見るに筑前博多住神屋壽貞建之と有るよし語れり」と、又た石州銀山舊記に「天文二年大内義興銀山を領するとき筑前博多より壽貞と云もの來て初て鏈を吹鎔し銀と成すことを仕出せり、是を銀吹の始とす、永祿中毛利元就銀山を取る大閤より上使近實某毛利家より三井某を以て銀山を奉行すと云々」更に歐洲方面に就きて見るにハプスブルグ家の勢力が鑛山事業に歸因せしことは史上顯著なる事實にして又、之れを個人に就きて見るに彼のアウクスブルグに於ける大富豪たるフガー家歴代中殊に家運の隆盛を來たさしめしヤコブ、フガーはゼノアのアントニオ、デ、カヴリスと協同して當時資金の缺乏を感せしチロルの領主ヂギスムントに前後約十七萬フロリンを貸與し之が抵當としてシュワッツ鑛山を獲得せし結果、此方面よりの年々の收入は二十萬フロリンに達し、かくて彼は漸次其手を擴げて匈牙利、チュリンゲン、西班牙地方に及ぼし爲めに其資産は千五百二十七年には二百萬フロリンと爲り前後十七年間に九百二十七パーセントの純益を得るに至つたのである。されども斯くの如き巨額の資金は既に其以前に於て此企業を經營するに相當なる準備資金を必要とするのである。故に之れを以て直ちに近世資本主義發生の原形態となすことは不可能である。

次ぎに殖民地經濟が近世資本主義の運動にとりて極めて顯著なる意義を有せしことは元より疑ふ餘地ないのであるが當時に於ける殖民地經濟の主要なる要素は殖民地産物の輸入と奴隷商賣とである。前者に就きてはアウグスブルグの大富豪たりしウエルザーは千五百三年リスボンに支店を設け、時の葡萄牙王、ドン、エマヌエルより印度貿易の特權を得、その翌年六萬六千デュカットの資を投じて三艘の船を印度に赴かしめしが、そが齎らせし香料及寶石は百七十五パーセントの純益を以て販賣せられたのである。又、英國は近世史上、奴隷商賣の國として有名で、彼のリバープールの如き倫敦の如きブリストルの如き何れも歐洲に於ける

之れが取引の中樞地にして、例者、千七百八十七年奴隷買入の爲め亞弗利加に赴きし同國船の數は百三十七艘其噸數二萬二千二百六十三噸奴隷買入の爲め持參せしものは小刀、鐵砲、火藥、綿織物、羊毛品、麻布等にして之れに價額を附すれば約七十萬磅而して是等の船舶にして亞弗利加の海岸に着せるものは即時十四の英國商館を通じて奴隷の買入に從事せしものと、一方には直接黑奴の商人に就きて取引せしものとあり、又奴隷は丁年以上の男子平均の價額十五磅尙ほ八週間航海の後西印度に上陸して賣渡さるゝ際の價額は三十五磅、但、航海の途次には疾病、自殺其他の事項の爲め七十五パーセントに減ずるを常としたのである。次ぎに是等の賣却せられし奴隷は多く英、西、佛等の殖民地に於ける甘藷栽培に從事せしもので、當時世人は彼等を稱して黑色金剛石となし殖民地經濟上最も重要なる要素なりしを見ても其意義の極めて大なりしことを知るを得るのである。

以上述ぶるが如く殖民地經濟は近世資本主義發展上極めて重要なる意義を有せしことは事實なるも然かも此事業たるや貴金屬採掘の場合と同じく準備的資金を必要とする點に於て必ずしも近世資本主義發生の根本的要素と見ること不可能である（未完）

慶應義塾の
三田通りの
カフエー
米華堂
電話高輪二二六六
●カルピスとソーダ水
●熱いコーヒーと紅茶
●宴會至便料理と菓子は御存じの美味